天の邪鬼

午雲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天の邪鬼

【Ｎコード】

Ｎ７９３９Ｆ

【作者名】

午雲

【あらすじ】

お爺と孫とが会話する話です。ほのぼのとはいきません。

ふもとの森で木を見上げている子供がいる。

「お爺、この木は、いつからここに生えてるんだ？」

すると、お爺も同じく木を見上げて言う。

「さあ、わしが小さい頃には、もう、こんなして立ってたかなあ」

お爺は小のこを取り出して、小さき枝を切りだした。

「ほれ、ここんとこに年輪が出とうる。この分じゃ、もう六百年は経っておるじゃろう。」

「そんなに永う生きとるのか」

闇夜の晩、子供は独りで出掛けて行って、斧を振るい、切り倒してみせた。

古い木は血を流す、といつかどこかで聞いた覚えがあるが、夜目をこらしても、やっぱり、血は流れてはいなかった。

その代わり、そんなことを考えたせいか、急に寒気が来た。

（六百年後に、不幸が襲いかかるだろう）

そんな気がした。

「なあに、その頃には、われは生きちゃいないや、知ったことか」

子供は斧を肩に寝かせて、切り株のもとを後にした。

大きくなって、その子の宅に、天の邪鬼が生まれた。

いまだ生き長らえていたお爺は、土間からあがってきて、その子を見ると、はっきりとその場で告げた。

「こりゃあ、あの木を切ったのは、お前じゃな」

刹那、かつての子供は、また寒気が来た。

「何じゃ、その顔色は、ー」

お爺は、孫の顔をひょいと見返して、それからため息をついた。

「言うまい、言うまい、はや、言うてもしょうないことじゃ」

（ばれちまったか）

かつての子供は、宙をにらみつけながら、そんなことを思い悔やんでいるのだった。

（後書き）

世に謂わゆる、迷信、とは、少なくとも、ドラマの種の、宝庫なのではないでしょうか？そんなことを、思ってしまいます。ありがとう。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7939f/

天の邪鬼

2010年11月19日07時41分発行